

## 鷹巢亜佐作 「卒業式」

(音楽) (「蛍の光」合唱)(FO)

宮原恵子 “明けてぞ今朝は別れゆく…”(ため息)今ごろ、卒業式の真っ最中か…。真利や由美ちゃん、みんな今日からバラバラ。最後の日だっていうのに、なんでこんなことになっちゃったんだろう。

ナレーション 宮原恵子は中学3年生。受験勉強も終わり、今日は彼女の学校、青春学園中等部の卒業式です。しかし恵子は独り病室のベッドに横たわっていました。なぜそんなことになったのでしょうか。それは、2週間ほど前のことでした。

(効果音) (教室のガヤ)

恵子 静かに！ 静かにしてください。それでは、うちのクラスの謝恩会の出し物はフォークソングの合唱ということに決めます。それでは明日から準備に入ります。解散！

桜井真利 大張り切りですねえ、恵子。

恵子 ちゃかすな！ いろいろ苦労あるのよ、卒業行事の責任者っていうのも。

真利 でも、一体どういう動機でしょ。今までそんなものめんどくさがってやらなかったくせに。

恵子 最後ぐらいはさ、みんなと一緒に必死にやろうと思って。

真利 なるほど。でもウソみたい。これが中学生生活最後の仕事だなんて。なんか感覚ないなー。どの道併設の高等部に行くんだから、同じ敷地内で校舎が違うだけ。その点、恵子はいいわね。

恵子 え？ あ、ほかの学校行くからね。

真利 けどどうして独りでほかの学校行っちゃうのよ。寂しくないの？

恵子 うん。(少し間)そうでもない。

真利 そう？ だって独りで知らない学校行くななんて、怖いし、みんなと別れるなんてできないな。

恵子 そうね。でもなんとかなるわよ。

真利 強いんだな、恵子は。ま、頑張ってください。謝恩会楽しみにしてるから。じゃあね！

恵子 バイバイ。(モノローグ)さてと、楽譜買いに行かなくちゃ。

(効果音) (街の雑音)

真利(回想エコー) そのうち、寂しい思いするんじゃない？

恵子(回想エコー)(モノローグ) そんなことない。そんなことあるもんか。寂しいはずがないじゃない。自分で選んだ道だもの。独りでだって寂しい思いなんかしない。独りでだって…。本当に一人でやっていかれるのかしら…？

(効果音) (車のクラクション。タイヤのスリップする音。)

恵子 あー！

(効果音) (救急車のサイレン)

(効果音) (恵子の部屋のドアを母親が開ける)

恵子の母 ただいま、恵子。起きているの？

(効果音) (ドアを閉める)

母 あ、今ここで村上さんの奥さんにバッタリ会ったのよ。「卒業式に行かないのか」って聞かれたわ。まったく、卒業式の半月前に交通事故で、式の当日に動けないなんて信じられないわ。でも、あなたもいけないですよ。ボンヤリと横断歩道の手前を渡っていたんですからね。大体、最近落ち着きがありませんでしたよ。

恵子 お母さん！ もういいわよ、「分かった」って言ったでしょ。わたしだって好きで事故に遭ったんじゃないんだから。

母 だってお前…。卒業式にすら出られないなんて。お友達ともう最後でしょう？ 特にあなたは、ほかの学校に行くというのに。

恵子 お母さん。お願いだから独りにしといてよ。出てって！

恵子(モノローグ) わたし、ヘン。なんでこんなにイライラしているの？ なんだかむなしくて。今日が卒業式だから？

(効果音) (外から聞こえる子供の歓声)

(効果音) (ドアをノックする音)

恵子 は、はい。どうぞ。

(効果音) (ドアが開く音)

山内先生 やあ、元気か、宮原？

恵子 先生！

ナレーション 入ってきたのは、恵子のクラスの副担任、山内先生でした。取り立てて目立つ人気者というわけではありませんが、生徒から温かい信頼を寄せられていました。

山内先生 思ったより元気だな。傷は、痛まないか？

恵子 山内先生、卒業式はどうなさったんですか？

山内先生 担任の小川先生に任せてきた。

恵子 そんな。先生、最後の日ですよ。みんなを見送ってあげなきゃ。わたしのことなんか、わざわざ…。

山内先生 ムリするな。本当は独りでショゲていたんだらう？ 宮原、みんなは担任の先生や、そのほかたくさんの人が見送ってくれるんだ。お前だけだれにも見送られないというのは不公平だらう？ だからわたしがお前の卒業式をする。そのために来たんだぞ。

恵子 先生…。

山内先生 どうだ、宮原。3年間なんて夢のようだったろう？

恵子 はい。もっともっといろいろなことができると思っていました。今考えると、時間の無駄遣いばかりしてたと思います。

山内先生 そうか。それに気づくことができれば上出来だ。それを生かしていくんだな、新しい生活の中で。

恵子 先生、わたし後悔しているんです、今とつても。

山内先生 何をだ？

恵子 併設高校ではない、ほかの高校に行くことを。

山内先生 そうか。

恵子 初めのうちは、こんな気持ちになるなんて思いもしなかったんです。けれど、今になると、3年間のいろいろな出来事が次々に思い出されてきて、悲しくて、寂しくて…。

山内先生 お前は自分で新しい道を選んだ。そこに何か、今よりもすばらしいものを望んで、その道を選択した。そうだな？

恵子 はい。

山内先生 その選択が間違っていると思うのか？

恵子 いいえ。でも、そのために、自分が独りになってしまう寂しさを、考えてもいなかったんです。大好きな友達や先生と別れるのなんてなんでもないことだって、一人で勘違いしていたんです。卒業式が近くなってくると、少しでもみんなと一緒にいたいという気持ちがあふれてきて、でもみんなのほうは何も感じていないみたいで、一人で焦ってて…。独りぼっちが怖くなってきたんです。みんなと離れて独りで行くなんて、耐えられません！

山内先生 (間)わたしも昔、人間は独りでも、自分さえ強ければ十分やっていけると思っていた。自分の意志で、自分の力で生き抜くことが、一番すばらしいと信じていたんだ。

恵子 そうじゃないんですか？

山内先生 人間はそんなに強くはないんだよ、宮原。ちょうどお前が今、人生のほんの一部にしか過ぎない別れに、つぶされそうになっているように…。

(効果音) (本の落ちる音)

恵子 あ、先生、本が。

山内先生 ああ、わたしが拾う

(効果音) (イスをずらす音)

恵子 それは… なんですか？

山内先生 わたしをいろいろな人生の別れの悲しさから救ってくれたものだ。

恵子 え？

山内先生           ほら、手に取ってごらん。そう、聖書だよ。宮原、そのしおりの挟んであるページの赤いアンダーラインの引いてあるところを呼んでみろ。

恵子               えっと… あ、ここ。「わたしはあなたと共にあり、あなたがどこへ行っても、あなたを守る。」

山内先生           創世記 28 章 15 節だ。

恵子               あなたと共にある…？ いつでも…？

山内先生           そうだ。神様がお前といつでも一緒にいてくださるんだ。決して離れることはないんだよ。お前は独りぼっちで新しい環境の中に飛び込んでいかななくてはならないと思っているだろう。そして、新しい生活への希望よりも、不安のほうが大きいだろう。でも少しも恐れることはないんだぞ。お前は独りじゃないんだ。時が来て、友達とは別れても、神様が共におられるんだよ。——わたしは、そのことに気づくのにはずいぶん時間がかかった。最初はバカにしていたよ。それが間違いだと気づいたのは、中 2 の時、わたしの母親が死んだ時だった。父親が忙しくて、完全に母親っ子だったわたしは、それは悲しくて、もう生きていけないと思った。その時にわたしの親友が、その聖書をくれたんだ。今お前が読んだ聖句に赤いアンダーラインを引いてな。

恵子               先生は、その時から独りで生きるのをやめたんですね？

山内先生           そうだ。それがわたしにとって、“人生の重要な卒業式”だったんだ。

恵子               それから今まで、先生は一度も寂しいことなかったんですか？

山内先生           あったさ。高 2 の時にはわたしを信仰に導いてくれたその親友が九州へ引っ越していった。大学卒業の時には、将来に対する意見がどうしても合わなくて、婚約していた女性と別れた。目の前が真っ暗になるような思いだった。仕事上の行き違い、人間関係のもつれ、細かいことを挙げたら数知れずさ。でもそのたんびにこの聖書の言葉がわたしを支え、立ち上がらせてくれたんだ。

恵子               先生。わたし、宗教のことよく分からないけれど。信じたいと思います、独りじゃないってこと。

山内先生           よし。それじゃあ今度はお前の卒業式だ。その前に、この聖書を宮原、お前にあげよう。

恵子               え？ でも、それは…。

山内先生           わたしはもう今までのむなしい生き方を卒業したからね。今度はお前の番だ。本当の意味の“卒業”ができるように。

恵子               はい、ありがとうございます。

山内先生           よし、卒業証書を読み上げるぞ。「卒業証書。宮原恵子。右は本稿所定の課程を修了したことを証する。1983 年 3 月…(FO)」

(音楽)           (聖歌「いかに恐るべき」BGM)

ナレーション     恵子は、心の中に一筋の光がともったように感じました。そして懐かしい友人

聖書の言葉

たちの笑顔を思い浮かべながら、もう一度その言葉をかみ締めたのです。  
「見よ、わたしはあなたと共にあり、あなたがどこへ行ってもあなたを守る。」(創  
世記 28 章 15 節)

<完>